

Life-economics の時代

山 崎 益 吉

The Age of the Life-economics

Yamazaki Masukichi

Summary

Today, we are faced with the severe crisis which has already spread all over the world. This crisis is roughly divided into two parts—the crisis of human society and the crisis of human world. The serious problem is that many fields in human life such as politics, economy, culture are entirely separated from moral values. Humankind has squandered natural resources, which caused disaster and destruction in many parts of the world. If the present condition continues, the human race will be the verge of perish before long. Unmitigated waste of natural resources will make human beings suffer fatal diseases. Therefore, the birth of a new society, which is based on the coexistence between men and nature, will be inevitable in future. This is why I highly recommend the life-economics in the age of lifeeconomy.

1. 「根こそぎ」現象

まことに危殆というほかはない。「天国に宝を積み」などということは、昔物語りなのか。「積善の人」、「積善の家」はどこへ行ってしまったのか。心許ないこと、この上ない。なぜ、「機械的化石化」が起こってしまったのか。Max Weber は「まだ誰にも分らない」と言った⁽¹⁾。だが、すでに、一世紀近く経ち、近年、だいぶ分るようになった。

現象は、本質の露呈でもある。現象を見ることによって、「精神の化石化」を追ってみよう。人間と自然、二つの方向で考えてみる。現代的社会像、現代的自然像と言い換えてもいい。では、現代的社会像はどうか。限りない人間性の崩壊が進行している。妄言、窃盗、暴力、放火、殺人など、数え上げればきりが無い。非人間性の極致と言っていい。さらに、現代的自然像はどうか。機械論的自然観によって自然への限りない収奪、破壊、「根こそぎ」現象など、自然崩壊がスピードをあ

げながら進行している。

なぜ、こうなったのか。詳しく見てみよう。理由は、いたって簡単にして明瞭である。世俗化 (Säkularisierung) と言っていい。現代は歯止めが効かない時代になった。歯止めは「根」でもある。それゆえ、「根」の崩壊である。「根の国」の崩壊は「根こそぎ」現象によって頷ける。「根」を絶つことになるから再び芽が出るはずがない。芽が出なければ自もでない。花も咲かないし、鼻を持つこともない。実などをつけるはずはないし、ましてや身の存在はない。これでは根拠へ復れない。いや根拠へ復れなくしていると言っていい。「根こそぎ」痛めつけたのでは、人間も自然も循環軌道にはのれない。「根こそぎ」は死を意味する。今日、自然への限りない「根こそぎ」が繰り広げられ、人間界にまで容赦なく襲いかかっている。「死に至る病」は人間、自然双方に限りなく進行していると見ていい。現代的世界観は自殺や殺人について真剣に考えてきたが、自然殺し、大地殺しについて考えてこなかった。理由はこれまたいたって簡単である。自然や大地は無限であると見なされてきたからである。人間の側に立った自然観、思い上がった人間中心の自然観である。なんとという冒瀆であろうか⁽²⁾。

アイヌの伝説に山菜を「根こそぎ」採ったために、死んだ村長の奥さんの話が出てくる。自然への敬意として、山菜取りのマナーは、けっして「根こそぎ」取らない。manner は取り扱いであるから山、自然を取り扱う習慣は山や自然への畏敬の念がなければならない。「根こそぎ」行者葫 (ぎょうじゃにんにく) を取ってしまった村長さんの奥さんが亡くなったのは、山、自然への畏敬の念を忘れたからである。行者葫の神様が怒って村長さんの奥さんを死に至らしめたのだ、と。だが、「よみ (黄泉) がえる方法はある」と若い娘に知恵を授ける。行者葫の乾いた葉を村長の家の斜面に撒けば、よみ (黄泉) がえるというのである⁽³⁾。

あの世は「黄泉 (よみ) の国」である。この世に対して使っているが、実は黄泉は「根の国」である。人はこの世を仮の宿として生を受けている。「根の国」に行ってまたこの世に蘇ってくる。「根の国」が本来の姿で、この世が仮の姿であるとすれば「黄泉の国」へ向かうのはけっして辛いことでも、悲しいことでもない。根拠へ復ることであるからむしろ喜ばしいに違いない。なぜならば、新しい生命を宿すところが「根の国」だからである。問題はなぜ村長の奥さんが亡くなったかである。これまでの経過から、なぜなのかは一目瞭然である。「根」を持たなければ新しい生命の誕生はなく、「根こそぎ」採ったのでは循環軌道にはのれず、生命の持続はあり得ないからである。村長の奥さんが亡くなったのは「根こそぎ」生命を絶つような振る舞い、傲慢さを誡めるためであった。「根こそぎ」の真意がいかに重いかが分る⁽⁴⁾。

2. 生命の循環運動

(1) 生命活動

実は、人間と自然は共通の生命をもって循環している。日本では、『古事記』の世界に代表され

るように、人間も自然の共通の器の中で生命を育てている、とみなされている。「黄泉の国」への旅立ちはけっして悲しいことでもなく、穢れたことでもない。新しい生命の準備段階として考えられている。『竹取物語』かぐや姫伝説に見られるように、「黄泉の国」からのよみ（黄泉）復りはまことに目出度いことであった。なぜならば生命の新たな誕生を意味するからである。

これはあくまでも神話の世界である。植物の世界は説明できても人間の世界を植物と同じように循環軌道にのせるのはたやすいことではない。だが、地球物理学を専門としている学者からも同じような指摘がなされている。「自分自身の身体は借物である⁽⁵⁾」というのである。人間には必ず死が待っている。人間、最後は亡くなる。身体は大自然からの借物である。少なくとも、元素は大自然からの借物であるという。身体を構成している元素は全部宇宙や地球の元素で出来ている。死という形で大自然に復っていく。自然から一時借用している身体は死という形で大自然に復っていく。その証拠として人間、生物に死がプログラムされている。人間、生物は永久に長らえない。いくら金を積んでも不可能である。不死、不老などは夢のまた夢である。不老長寿の名薬はない。大自然の中にプログラムされている生物としての人間は大自然に復らなければ、次の世代の誕生はない。復すからこそまた別の貸し出しが出来る。生命は死んで生まれ、生まれて死んでの繰り返しである。新しい生命がよみ（黄泉）がえることによって、次世代が形成される。生と死を繰り返しながら生命の循環運動が繰り返される。人間のことを human nature という。人間の自然である。human は大地（the earth）を意味している。man（人間）は「呼吸する」という意味であるから、元来、人間がいかなる性質をもっているかは明瞭である。生をうけた人間は「息をする」ことに本質がある。人間も自然も、最終的には大地へ復っていく。復土の思想である。ここに、人間の循環運動の本質があると考えていい。これ以外に人間の生きる道はない。大自然の中で生かされていることを知る。

この世に生を受け、この世に生息することは基本的に生命活動である。人間は自然と共存し、息をし生きながらえる仕組みをどう作っていくかが、この世に生を受けた人間の使命であるはずである。自然とて例外ではない。一部の手になれる富などは、全生命活動から考えるならば取るに足らないことかも知れない。金（カネ）の世に明け暮れしているヘッジファンドに代表されるような金融取引などは、神から見れば「何とはしない生業」なのかということになる。錬金術では意味がないことも一目瞭然である。何億円、何十億円積んだところでけっして善行であるはずはない。とても、「天国に宝を積んだ」ことにはならないそうした行為は、全地球、大自然の悠久な息づかいから見れば、循環運動を崩壊させる以外の何物でもないことになる。ましてや、マネーゲームに見られるように他を犠牲にした富などは論外であろう⁽⁶⁾。

だが、現実には生命活動、循環軌道を疎外することがいかに多いことか。地球を剥ぎおとし「根こそぎ」収奪しようとしている。自然ばかりではない。人間社会にあっても、「根こそぎ」現象が進展している。本来、生命活動としての生産活動であるはずの生業、生命活動が息をたたれ、ここでも「根こそぎ」現象が人間そのものの手によって行われている。過剰人員ということで整理され、

非正規労働者が労働者全体の三分の一近くまで占めている実態がこの事を端的に示している。さらに、能力がないということでリストラの対象になり、物ばかりか、人間までもが使い捨てにされている⁽⁷⁾。元来、生産活動は生命活動である。息をして生ける大自然の一員として大自然を尊い素材として使用させてもらい、生命を吹き込む神聖な生業によって生産物が生まれる。経済活動は生命活動であることが分る。けっして死んだ物を作っているわけではない。生きた生命活動の結果として、生きた生命体に息を吹き込むことによって、新たな生命体が誕生していることが分る。それが人間、大自然の分身としての商品 (goods) である。元来よき物、goods と呼ぶのはそれがためである。けっして bads、悪しき物ではない。生命体に死が待っているように、商品にも死が待っている。商品もまた生命体であるからである。こちらの方も大地に復っていく。新たな商品誕生の準備である大地、人間世界でいえば「根の国」に復って行くことによって、再び新たな生命の誕生が約束される。これが自然、人間の摂理でなくて何であろう。

(2) life-economics

経済学は生命体を対象とした学問であることを知る必要がある。物の合理性だけを追求する経済学では人間社会本来のあり方は分らない。経済学はたんなる οἶκος (house、家) νομός (law、法) οἰκονομία (経済、one who manages household)、economy では十分ではないからである。さらに、経済の語源になっている「経国済民」、「経世済民」は生命体を取り扱う経済の実態を表わしているとは思えない。life-economics (生の経済学) は生命体を取り扱う。生命体のやり方の関係を対象とする。life-economics は生の証としての命の交換、吹き込みである。これまでの経済学の概念を根本から変える必要があろう。それゆえ、これからの経済学は生、life のあり方、法 (νομός) でなければならない。life (生) の νομός (法) である。換言すれば、lifeeconomy (生の経済)、生の経済学 (life-economics) がこれからの経済学ということになるであろう。生きた生命体を対象とする経済学は lifeeconomy (生の経済) を対象とし、それを研究するのが life-economics (生の経済学) ということになる。life-economics を提唱するゆえんである。死して大地に復れない物は、life-economics で取り扱えないことが明らかである。大自然の中では大地に復れない物は何一つとしてない⁽⁸⁾。

3. 人間と自然の循環としての労働

(1) life-economicsの真意

life-economics の対象は生きた生命体のぶつかり合いを究明するものでなければならない。これまでのように物の合理性を追求するという狭い考えでは、とても生命体の持つ本質に迫ることは出来ないからである。そこで経済学についてこれまでの歴史を振りかえっておこう。経済学は「市民社会の論理学である」、「解剖学である」と言われてきた。Adam Smith の経済学に見られるように、

近代になって成立したということでそう呼ばれている⁽⁹⁾。だが、それは人間の側に立った整理の仕方、物事の存在としての生命体を取り扱ってはいない。取り扱っていると行ってもごく一部にすぎない。生命体は何も近代に至ってから存在しているわけではない。地球の存在と共に存在していることを考えれば、近代社会になって経済学が存在したというだけでは、生命体の本質に迫ることは出来ない。実はここが問題である。

古代ギリシャにあって経済学はどう考えられたであろうか。οίκος、家を切り盛りする法、νομοςとして考えられた。Aristotle の作と言われている『経済学』οικονομικάは、社会の経済概念よりも広く捉えているので生命体に近いと言っていい⁽¹⁰⁾。農業が主体となっているからより生命体に近いと言えるかも知れない。とはいえ、生命体そのものは問われてはいない。Aristotle にそこまで期待するのは無理かも知れない。Aristotle は経済と貨殖をきちんと区別している。貨殖は chrematistische と表現され、οικονομικάと区別したわけである。生命体こそ意識していないものの貨殖を経済と切り離れたことは近代の経済概念より本質に迫ったものと見なしてよいであろう。その背後に生成論が存在していたことは言うまでもない⁽¹¹⁾。さらに、自然に対する畏敬の念も持ち合わせていたことは生命体への意識を持ち合わせていたと考えていいであろう。

人間と自然との交流について、ケルト文化について考えてみよう。近代社会が成立する遙か以前、アイルランドではケルト人が自然と共存関係を保っていた。トリニティ大学のケルズの書はそれをよく表わしている。人間を取り巻く自然界の生命体と共存していた様子がケルズの書に描かれている。自然との共存関係はアイルランド各地に存在している。このことは他の生命体と共に命の交換関係を通して生存を図っていたことを示している、と見なしてもいいであろう⁽¹²⁾。

古代の日本人もそう考えていた。人間を取り巻く自然界に神が宿っていると見なし、山や海、岩や木などを神として祀った。自然に対する畏敬の念からであり、山や海によって生かされていることを生活上心得ていたからにはほかならない。山の幸、海の幸によって生命体としての人間が生かされているという自然への深い信仰からきていると考えていい。自然によって生かされているということは、生命体の交換そのものではないか。だから生命体の対象として神が至る所に祀られた。要するに、自然と人間は表裏一体の関係にあったとことが伺える。洋の東西を問わず、古代社会には生命体として自然との共存を図り、少なくとも自然の側に立った自然観を、自然への畏敬の念もっていたことは確かである。ここでは、人間も自然の一部である。人間は大地である。死を通して次の生命を呼び起こす生命体であった。自然に対する「根こそぎ」ということはない。

近代になると、こうした考えが一変する。神から解放された人間は、自己実現を目指して、自然を完全に支配下に置こうと策をめぐらした。科学技術を駆使して、自然を無理矢理随わせようとし、自然のサイクルを縮小し効率を上げようと腐心した。いわゆる、機械論的自然観である。この機械論的自然観の延長に、経済学が誕生する。経済学は自然を無限であると錯覚してきた。水とダイヤモンドの交換の例を上げるまでもなく、水は無限にあると考えられてきた。だが今日、ダイヤモンドはなくても生きていけるが、水がなければ生きていけない。この簡単な理由が白日の下に晒され

ることになった。

(2) 生命体形成としての労働

人間は人間のことしか考えなくなった。国の富を増やすといっても人間に都合のいいように考えるようになったに過ぎない。富はいかなる存在なのか。物資を十分に享受できるように考えたのが経済学である。だから、経済学は「市民社会の解剖学」、となったわけである。商品を大量に安価に供給できる仕組みを考えることが経済学の使命と見なされ、自然を限りなく効率的に利用する仕組みを、換言すれば、最小の費用でいかに大きな成果を上げることが出来るかどうかを究明するかが経済学の課題となった。あくまでも人間のための効率化であることが分る。

そこで、人間の本質としての労働を考えてみよう。人間の本質は労働にあると言っても過言ではない。この簡単なことは、動物と比べるならば一目瞭然である。動物は人間のように労働はしない。良き物を作るのは労働である。良き物を生産するということは、労働が生命活動である証拠である。つまり、神聖な労働を自然、素材に注ぎ込むことによって良き物を生命活動の結果として他の生命を育むことであるから、労働がいかなるものであるかが分る。だから、労働のあり方が問題となる。労働はたんなるエネルギーの放出ではなく、貴い生命活動である。labour と言われるゆえんである。labour には「重荷を負いて」という神聖な意味合いがある。work とは異なる。work はどちらかと言えばエネルギーの放出に近い概念である。機械的な労働と生命活動では意味が違う。ここに、labour と work の根本的な相違がある。

(3) 労働価値説

だが、現実には labour から work になっているのではないか。Adam Smith の労働価値説を取り上げてみる。Smith の労働概念も生命活動は謳ってはいない。物を作るのは労働であって、その労働に投下労働と支配労働があると述べるに止まっている。物を作るとしただけでは、エネルギーの移行でしかない。それゆえ出来上がった商品も生命体としての命の源泉という意味合いはない。Smith といえどもそこまでは見ていなかった。なぜならば、神からの解放過程を考えている Smith にそれを期待することは無理である。deism、理神論に立っているとはいえ無神論に近い理神論であるため生命活動とはならない。ここで興味があるのは、Smith の労働観がプロテスタントの倫理と付設するという点である。プロテスタントの倫理は神との断絶、絶望の縁から立ち上がる。神の方から拒絶された人間は実に巧妙な知恵を発揮する。どうせ神からの救いの道がないとするならば、せめて救いの証を求めて現世に止まり、限らない努力をする以外にはない。そこでせめて「救いへの確信⁽¹³⁾」だけは得たい。「救いへの確信」は、神聖な労働に勤しむ以外にはない。「祈りかつ働く」(ora et labora) ことである。一生懸命働いているのであるから、いずれ神はその努力を見て救ってくれるかも知れない、との一縷の望みを持ってこの世で証を立てることである。具体的な実践が、勤勉、節約である。

勤勉について考えてみよう。勤勉とは一所懸命働くことである。industry であるが、これは労働の質を含んだ言葉である。diligent つまり loving であるから本来の勤勉は愛という意味である。それゆえ勤勉は大きな意味で人間愛なわけである。労働は「罪の治療剤」(remedium peccantia) でもある。ところが、一般に industrial society 産業社会と言われているのを見ても分るとおり、これでは勤勉の本来の意味はつかめない。それゆえ生命体に近いということは分らない。勤勉は産業ではない。近代社会が産業社会であるため、industry を産業としたのでは industry 本来の意味をつかむことは出来ない。これでは生命活動からますます離れていってしまう。

節約についても同じことが言える。節約は saving であるが、これは救う save に繋がる。だが、これとても人間を物的に救うという意味合いがついて回るから、これまた産業社会の意味合いが強い。生命体の活動からはほど遠い。経済学で使われている節約は資本論であり、生産の基盤になっている。節約が新たな生命体の蘇りを意味するのでなければ循環軌道にはのれない。人間と自然の循環軌道にいかのせてやるかが、生きた生命体の蘇りとしての節約の思想である。ここでいう節約は生命体の蘇り、資本そのものが節約でなければならない。

(4) 労働の真意

本来の労働について考えてみよう。労働は人間の本質である。人間という生命体の支出が労働である。神聖な労働による商品の形成は、これまた生命体としての作品の中に体现される。労働の移管を通して生命体と生命体が直に繋がることによって、新たな生命体が具体化する。これが労働の本質であり、労働を通して自然と人間が真に連携することが出来るゆえんである。労働がたんなるエネルギーの放出ではない真意がここにある。ある意味では、労働は倫理や道徳をはるかに超えていると言っている。生命活動はたんに消費財、生産財を形成するだけではない。それゆえ、Smith の労働観、プロテスタントの労働観とも異なる。生命活動としての労働は、倫理や道徳が成立する以前の生命体としての労働観ということである。自然と人間の関係は、生命体と生命体の交換である。労働は生命体と生命体を繋ぐ命の伝達、注入である。ここに労働の本質があると見ねばなるまい。人間が楽園から追放されたのは、傲慢にならないために労働という神聖な生業を忘れさせないためであったことを想起すべきである。近代の労働観よりもこちらの方が、生命活動としての労働観に近い。であればこそ、労働は真の喜びとなるはずである。苦痛でもなんでもない。新たな命の創造であるから貴い。限りある生命体であればこそ、現世における労働は次の生命体の源泉として喜び、勤しむことでなければ意味がないではないか。Karl Marx の労働はあくまでも手段であるとする立場に立つゆえ、そこには苦痛はあっても喜び、誇りを見いだすことは無理である。手段から抜け出すことが出来ないとするならば、生命体の循環軌道にはのれないではないか⁽¹⁴⁾。これほど悲劇的なことはなかろう。Marx がいかに労働を短絡的に見ていたかも理解できる。

生命体の循環過程が労働であるとすれば、そこに喜びとしての労働を見いだすことは可能であろう。ここには疎外という発想はない⁽¹⁵⁾。

4. 生命体としての商品

(1) 欲望の対象としての商品

商品はたんなる物ではない。生命を吹き込まれた生命体の商品である。そこで近代経済学が商品をどう考えているかを見ておこう。近代経済学は商品を効用という視点で捉えている。商品に価値があるのは、その商品がどれほどの効用、utility があるかによって決まると考えている。裏を返せば、効用がない商品は価値がないことになる。Smith をはじめとする古典経済学は商品を労働という視点からみていた。その限りでは商品の価値は効用にありとする一連の近代経済学より本質に迫っているといえる。ここで問題になるのは、効用が生命体としての商品といかなる関係にあるかということである。古典派のいう労働価値は生命体に近い概念を持っていた。労働に商品価値の源泉があるという点では、効用にあるとする価値論よりも本質をついている。

では、なぜこうも本質から離れてしまったのか。効用学派には人間という視点がいってこない。ここが問題である。人間という視点がいってこなければ、生命体としての商品の概念を見いだすことは出来ない。Smith は、少なくとも、opus (人) と opera (物) の平等な関係が確立すると信じ、労働によって平等な価値が確立すると信じていた。人が見えない経済学などはじめから存在していなかった。だが、近代経済学は「古典派は逆立ちしている」と主張する。「価値はことごとく効用に依存する」ということに重きを置くようになって、生命体としての商品価値からますます遠ざかっていく。political economy はたんなる economics になり、「古典派は逆立ち」していることになった⁽¹⁶⁾。W. S. Jevons が告白しているように Aristotle が放棄した chrematistische を再び取り上げようとしたところに、近代経済学の本質が隠されているとみていい。W. S. Jevons がいかに経済学を考えていたかは The Theory of Political Economy, 1871. (『経済学の理論』)「第二版への序文」を見れば明らかである。

Jevons は political economy から economics への名称変更を「些細な変更」と簡単に片づけているが、果たしてそうであろうか。これは二重の意味で重要である。一つは古典派からの決別であり、他はたんなる物に重きを置くとしたことである。つまり utility に経済学の視点に移ったということである。そして三番目に本稿が主張する life-economics からほど遠い存在になってしまっていること、つまり生命体としての商品ではなくなってしまうということである。Jevons は economics を political economy に変更した理由を「古い迷惑な複合名辞は、出来るだけ速やかに解体されてしかるべきと考えざるを得ない⁽¹⁷⁾」と強調している。その際、plutology, chrematistics, catallactics などの新たな名称の導入を試みたが、結局 economics に落ち着く。その理由は「従来の名辞より類似し且つ綿密に関連している」からである。だが、さらに、Jevons は続けてこうも言っている。economics は「形式上 mathematics, ethics, aesthetics 及び幾多の知識部門と完全に類似し」ている。それだけではない。『加之、アリストゥトル時代以来の伝統を持つものである』⁽¹⁸⁾

と。だが、これほど economics を強調した Jevons だが political economy なる名称に拘り economics を使用しなかった。諸般の事情によりと強調しているが、時機が熟していなかったということであろう。それに落ち着いたと言うよりも、Jevons が ethics, aesthetics と言っている箇所である。さらに、plutology, chrematistics, catallactics などを念頭に置きながら economics に落ち着いたという真意である。Aristotle は chrematistics を貨殖術として退けている。こう考えてくると Jevons の真意がどこにあるかは明瞭である。「価値はことごとく効用に依存する⁽¹⁹⁾」。効用論は新奇であるという。「今日行われている意見は、効用よりも寧ろ労働を価値の起源とするものであって、中にははっきりと労働は価値の原因だと主張するものすらいるのである。予は之に反して満足なる交換理論に到達せんが為には、ただ吾々の有する貨物の量に倚存するものとしての効用変動の自然法則をさへ注意深く追尋すれば好いので通常の供給需要法則は右理論の帰結に外ならぬことを明かにする⁽²⁰⁾」。さらに同時代の Leon Walras は「有用な物が欲求に応えるか、あるいは満足を与えるかが道徳的であるか、不道徳であるかは問題ではない。ある物が病人の治療の目的のために医師によりもとめられるか、あるいは人を殺害しようとして殺人者により求められるかは、私どもの観点からは全く興味のない問題である⁽²¹⁾」と言って憚らない。この延長線上に J. A. Schumpeter の均衡論が展開される。労働から効用へ、人から物へたんなる経済の学に視点が移っていく。ここでは wie、どのようにが問われるに過ぎず、warum、なぜかを問う必要はないという⁽²²⁾。生命体として商品、人間と自然の調和としての生産活動、その結果としての商品という図式から大きく逸脱してしまっていることは論を待たない。

(2) 効用論の帰結

「古典派は逆立ちしている」といって欲望、効用に基礎を置く近代経済学からは人間の姿、人間の顔が見えない。存在するのは財の均衡関係だけである。どちらの財が効用が大であるかは労働による評価ではなく、欲望の大小によって決まってしまうから神聖なる労働概念など入り込む余地はない。リングとミカンどちらに大きい効用があるか。それはその人の嗜好にある。どれほど労働を費やしたかではなく、どれだけ欲望を満足させることにかかっているから、神聖な労働を問う必要はない。ましてや生命活動としての神聖な労働観など存在しない。人間と自然との生命活動などということは眼中にないことになる。問題となるのは、価格と費用の関係においてどれほど安くできるかを競えばよいということになるだけであるから労働の本質など問う必要はない。work、エネルギーの放出はどうかを問えばいいから最小の費用による最大効果を追求することが経済学の主題となる。さらに、効用学派をはじめとする近代経済学の群像は理論を一層精緻化させる。費用と価格、需要の弾力、生産の極大化など生命体からはほど遠い設計合理主義の世界に入り込む。実は、ますます経済の実態からかけ離れていくという、パラドックスが生じてしまう。

ここでは商品は生命体ではなくなる。たんなる欲望を満足させてくれる物でしかない。人間の手から離れた物の合理性が追求されるに過ぎない。「市民社会の論理学」という性質さえ放棄される。

存在するのは物の大小、効用の大小である。効用論の行き着く先は物の合理性を極限まで追求する結果、逆に物の合理性が人間の合理性を要求するという点にある⁽²³⁾。金持ちの犬や猫が牛肉や牛乳をたらふく食ったり飲んだりしていることも経済合理主義の視点に立てば just allocation、適正配分なのである。これは一種の疎外である。人間の前に物が立ちほだかる。物が逆に人間を支配する。ここから何が起こるか。抑圧された物に押しつぶされた人間である。さらに厄介なことに、この逆転した関係になんの疑いも持たないという事実である。疎外が当たり前であると思ってしまうことである。いや分っていないながらもこうした本末転倒した関係から抜け出せないでいる現代の仕組みが大きく立ちほだかっているという事実である。

効用極大化の法則は貨幣の世界に端的に表れている。重商主義を持ち出すまでもなく、現代においても金銀が富の極致と見なされている。それゆえ効用極大化が支配するところ貨幣が富と錯覚されてしまうのは今も昔も変わらない。貨殖術として貨幣で貨幣を買うことが金銀を貯える最短の道である。合法的な手段、公認された金銀獲得競争は、金銀の売買による貨幣の蓄積であろう。貨幣獲得競争の極致はヘッジファンドに代表されるようにマネーゲーム以外ではあり得ない。star wars ならぬ money wars の世界である。リーマンショックは錬金術のなれの果てとっていいかも知れない。ここには生命体の交換など微塵もない。あるのは物としての金銀、金銭感情、金銭勘定でしかない。

(3) 真の商品

現代社会には生命体としての商品はないのか。金銭勘定としての商品からは息をして生きる生命体の交換としての経済は蘇らないのか。蘇らないとしたならば、金銀を富として追求する以外に道はないのか。すぐにでも答えが出せるであろう。生命体としての商品が重要なのか、はたまた非生命体としての商品が重要なのかは、一目瞭然である。単純に言って、生きている物の方が死んでいる物よりも価値が高いに決まっている。経済活動が生命活動を対象としているならば、生きて、息をしている方に重きを置くのは当然である。単純に価格だけの世界だけではないはずである。市場が支配しない世界も沢山あることを認識しなければならない。priceless、価格外における生命をもっと尊重しなければならない時期にきているのではなからうか。

自然から離れ、理念型によって精緻化されればされるほど生命体からかけ離れていかに得ない⁽²⁴⁾。金銀獲得競争に血眼になっているところでは早い者勝ちが合い言葉になる。早い者が遅い者を制し、飲み込んでいく。情報化社会の進展と共にそうした傾向がますます加速される。ここでは金銀が正義となる。後れた富は相手にされない。まさに、「富は力なり」である。「金銀は力なり」である。金銀を貯め込む方が有能であり、力があることになる。金銀がものをいう社会では知識は何の役にも立たない。むしろない方がよい。なぜならば、なまじっか知識がある者は金銀獲得競争などに打って出ようとは思わないからである。教養や知識が邪魔になるから、金銀獲得競争には向かない。帳場に汚れを持つ感性鋭い人間には、非道な金銭は取り扱えない。金銀を夢見るよりは、

教養を身につける方が楽しいと思っているからである⁽²⁵⁾。生命体の交換の方が真に迫っていると思っているからである。自然に身を置き、人間と自然生命の交換の方が人間的であると考えているからである。そんな時間があつたならば、生きた経済関係を取り結びたいと考えているからで、そう考えた方が自然的であり人間的であることが分っているからである。バブル崩壊はそのことを体験的に教えたはずである。生命体の生産を担う人々の方が、神の「御技」、神聖な「道」であることを認識しなければならない。

5. 結び

経済学は近代社会を説明するために成立した。だが、今日、これほど経済学が進歩発展、精緻化しているというのに厳しい現実を説明できないでいる。それどころか、混乱の原因を経済学が作っていると言えなくもない。「万事金の世の中」の譬どおり、金銭にからむ秩序なき社会現象が頻繁に起こっている。ひどいときには、生命さえも金銭の対象になっている。「死んでお詫びを致します」ということになるのであろうが、死んでも解決のつかない悲劇が後を絶っていない。最近の金銭不祥事を見ているだけでも、「恐ろしい」と思わずにはいられない。恐怖の一語に尽きる。経世済民などというものではない。一般の金融機関の貸し渋りがルートを代えてゼロ金利時代というのに40%もの金利を課していたというのであるから異常としか言いようがない。取り立てがまた尋常ではない。常軌を逸している。普段では経験することのない会話や応接が展開されている。それどころか、こうしたことに何の恥ずかしめを持たず、堂々と自己弁護している。非生命系の極致と言っている。生命が非生命の前で平伏している。これが生命体のない経済の実態である。

ここでは貴い生命体が非生命体の犠牲になっている。植物を「根こそぎ」取った罰として神は生命を絶った。今日では非生命体のために貴い生命体が犠牲に晒されている。これは正常ではない。なぜ、こうしたか価値観の転倒が起こってしまったのか。経済学は金銭の前に、なぜ、こうも無力になってしまったのか。シェイクスピアではないが、人間は黄金の前に、なぜ、理性が働かないのか。深刻な危機を前にしていかなる手だてがあるのか。理由はこれまたいたって簡単で、生命体の経済学に転換することである。economics から life-economics へ移行することである。非生命体、金銀に価値を見いだすのではなく、さらに実態のない経済、金融に血眼になるのではなく、息をし、生きている生命体に価値を見いだす life-economics を確立することである。そのためには天道、自然の中に人道を見いだし自然と人間の調和の中に、生命体の交換ということを通して、生命の維持を図っていくという基本に立ち復ることであろう。どうあがいても人間は天道、自然の一部としてしか存立の道はないし、生きた生命体に価値を見いだす以外に生きる術はないのである。生命体からあまりにもかけ離れた現代社会の自然的限界、社会的限界がこのことを端的に物語っている。天道すなわち自然法則のなかに誠の営みとしての人道を見いだす以外に生きる道はないことを想起すべきである。「誠の道」、天道、自然の中に誠の営みとしての人道を実現することである。「至誠」

である⁽²⁶⁾。横井小楠の言葉を借りれば「惻怛の良心」である⁽²⁷⁾。「惻怛の至誠⁽²⁸⁾」をとおして、いま、ここにある、人の営みのなかに「永遠の相」を読み取る必要があるわけである⁽²⁹⁾。いま、ここにある相をとおして未来の真の相（すがた）を天道、人道のなかに見いだすことが出来る⁽³⁰⁾。lifeeconomy（生命経済）に基礎をおくlife-economics（生命経済学）を提唱するゆえんである。life-economicsの到来が待たれてならない⁽³¹⁾。

（やまざき ますきち・本学名誉教授）

注)

- (1) Max Weber, Die protestantische Ethik und der Geist des Kapitalismus, 1920. 大塚久雄 訳『プロテスタントイデオロギイの倫理と資本主義の精神』（岩波文庫、1989年）366頁。
ウエーバーは本書の終わりで次のように予言している。「こうした文化発展の最後に現れる末人たちにとっては、次の言葉が真理となるのではなかろうか。精神のない専門人、心情のない享楽人。この無のものは、人間性のかつて達したことの無い段階まですでに登りつめた、と自惚れるだろうと」（同上）
- (2) 中西進『円還する生命の象徴』『Mythology』別冊『MOKU』（民俗とロマンを探る）1999年7月、参照。
- (3) 萱野茂『生きる力は民話が教えた』『MOKU』1999年7月、参照。
- (4) 橋本一明、渡辺一民訳『シモヌ・ペイユ著作集』『根をもつこと』（第五巻）春秋社。1998年、参照。
- (5) 桜井邦彦、村上和雄『未知からのコンタクト』『MOKU』200頁。1998.8.
- (6) なおこの点については次の書物を参照されたい。Paol Ormerod, The Death of Economics, 1994. 斉藤精一郎訳『経済学は死んだーいま、エコノミストは何を問われているか』（ダイヤモンド社、1995年）、「特集経済学は役に立つのか」（『This is読売』読売新聞社、1998.5.）。榎原英資『市場原理主義の終焉ー国際金融の15年』（PHP研究所、1999.）。中谷巖『資本主義はなぜ自壊したのかー日本再生への提言』（集英社、1999.）
- (7) J. M. Keynes, The General Theory of Employment, Interest and Money, 1936. 参照。非常時であるとはいえ、使い捨て経済の奨励によって経済が成り立つとすれば、不健全であるというほかはない。有効需要論が改めて問われなければならない。使い捨て経済の背後に使い捨てにされる人間がいることを忘れてはならないからである。「marketingとは早く物を捨てさせる工夫である」と名言を吐いた人がいたが、これでは早晚行き詰まるではないか。
- (8) 宇沢弘文氏はこう述べている。「今から50年前私は数学から経済学に移った。……河上肇がジョン・ラスキンの有名な言葉を引いて経済学の本質を説いたが、その言葉は、当時の私の心情にぴったり適合した。There is no wealth but life（富を求めるのは道を開くためである）と訳して、経済学を学ぶときの基本的な姿勢として大切にしている」（はしがき）『経済学と人間の心』（東洋経済新報社、2003.）
- (9) スミスの経済学についてはいまさら屋上屋を重ねるつもりはないが、次のことだけは言う必要がある。経済学はスミスの体系の中で原因として考察されたのではなくその結果誕生しているという事実である。moral philosophy の体系は natural theology、ethics-strictly so-called、jurisprudence、political economy であるが、経済学は最後に登場する。元来、スミスは経済学を専門とする学者ではなかった。道徳哲学が専門であった。今日のように細分化された経済学を取り扱ってはいない。したがって、経済学がどのような性質を有しているかは political economy が他の関係とどうなっていたかを見ねばならない。スミスの経済学からは人間の顔が見えないたんなる財の均衡関係などということはない。経済関係は justice を抜きには考えられない。それが証拠には、Edinburgh の Cannongate Cemetery に The Theory of Moral Sentiments、The Wealth of Nations の著者として紹介されているのを見れば、Smith が経済学をどう考えていたかはこれ以上の説明は不要用であろう。
- (10) Aristotle は『経済学』第3章で次のように述べている。「人間に関する配慮のうち、妻に対する配慮がまず第一である。女と男にとっては共同生活が最も自然であるから。……自然は生物の個体を作ると同様に、かような結合を多数つくり出すことを目的としているということを前提として定めたから。女

性は男性なしでは、また男性は女性なしでは之を果たすことができないので、かくして必然的に彼らの共同生活が成り立ったのである。……女性と男性とはたんに存在すると言うのではなく、善い生活をするために互いに力を協せるからである。そして、子供をつくるのはたんに自然への奉仕のためばかりではなく、また己の利益のためでもある。強壯な親が未だ弱い子どもに対して骨折って世話をすれば、老年になって弱くなってから再び強壯な子どもから同じ世話を受けるわけだから。同時に自然もまたこのような循環によって人間の永続を図って行く。何となれば自然は箇々のものとして保存する力はないが、種として保存することができるから。かように神意により夫と妻との双方の性質は共同生活をするように予め定められている。」(429-430頁) (村川堅太郎訳『アリストテレス全集15』「経済学」) 岩波書店、1969.

- (11) 拙稿『人と思想－自然・生成・作為』（『群馬にみる人・自然・思想－生成と共生の世界』（高崎経済大学付属産業研究所編、日本経済評論社刊、1995. 参照）
- (12) Nathaniel Harris, *Heritage of Ireland—A History of Ireland and Its People*, 1998. The Book People Ltd. London. 参照。
- (13) Weber, 前掲、訳書、217頁。
- (14) 柴田敬『転換期の経済学—現代経済学批判』日本経済評論社、1978. 参照。
- (15) Karl Marx-Friedrich Engels: *Werke Ergänzungsband erster Teil*, Institut für Marxismus-Leninismus beim ZK der SED, Dietz Verlag Berlin, 1968. 土屋保男訳『カール・マルクス＝フリードリッヒエンゲルス全集、補完、第一分冊』『1844年の経済学・哲学手稿』「疎外された労働」430-443頁) 参照。
- (16) 難波田春男『国家と経済』62頁。(『難波田春男著作集 6』早稲田大学出版会、1982.
- (17) William Stanley Jevons, *The Theory of Political Economy*, 1871. 小泉信三、寺尾琢磨、永田清共訳『経済学の理論』第2版への序文、10-11頁 (日本評論社、1944.)
- (18) 同上、11頁。
- (19) 同上、第1章「緒論」1頁。
- (21) 同上、1－2頁。
- (20) Leon Walras, *Elements of Pure Economics or the Theory of Social Wealth*, 1953. p.65. The Definitive Edition (1926) of the *Elements D'economie Politique Pure*. (William Jaffe)
- (22) J. A. Schumpeter, *Das Wesen und der Hauptinhalt der theoretischen national Oekonomie*, 1908. 大野忠男、木村健康、安井琢磨訳『理論経済学の本質と主要内容』岩波書店、1984. 参照。経済学に関する記述をいくつか上げておこう。「われわれに肝要なのは、事象であって人間ではない」(邦訳「序文」9頁)。「精密経済学は決して、人間の経済的行為の哲学ではない」(152頁)。「われわれは経済学を、人間行為の他の一切の側面から切り離すばかりか、経済学の根底をなしていると思われる、その最も固有な地盤から切り離す」(254頁)。
- (23) Amartya Sen, *Choice, Welfare, and Measurement*, 1982. 大場 健、川本隆史訳『合理的な愚か者、経済学＝倫理的探求』(勁草書房、1989.) 参照。
- (24) Werner Sombart はこう述べている。「この過程において、人間は自然から引き離された。もはや都会の子どもは、自然が牧童にさまざまに与える秘められた刺激を知らない。鳥の歌う声を知らず、鳥の巣から雛を取ったことも知らない。空をゆく雲の意味を知らず、嵐や雷のとどろきを聞き分けることもない。野を走る獣たちとともに生い育ちはせず、獣の習性を知らない。実在するものにおける本能的に確実なものは失われてしまった。田舎の人間が自然のままの数々の栄枯盛衰の中にある自然の忠告を知っているのに大都会の子にはその判断ができない。かくして、もはや昼と夜、夏と冬という永遠の自然現象に生活のリズムを規定されていないような人種が生育する。自然現象は、学校における直観教育で研究しているに過ぎない。この新しい人種は人工的な生活をしているわけである。それはもはや自然のままの存在ではなく、学校教育と懐中時計と新聞と雨傘と書物と政治と電灯との複雑な混合物に他ならない」。(Werner Sombart, *Duetscher Sozialismus*, 1934. 難波田春男訳『ドイツ社会主義』39-40頁、早稲田大学出版会、1982.)
- (25) 同上、第3章「精神生活」参照。
- (26) 『中庸』には次のようにある。「誠者、天之道也。誠之人之道也。誠者、不勉而中、不思而得、從容中道。聖人也。誠之者、擇善而固執之者也」(金谷治 訳注『中庸』、岩波文庫、202頁)
- (27) 横井小楠「国是三論—富国論」(日本史籍協会編、東京大学出版会『横井小楠関係史料 1』) 参照。

- (28) 拙稿「横井小楠 幕末の思想家・横井小楠に学ぶ経済哲学：経済行動の基本に誠意あり」（『人間会議』2003. 冬号）参照。
- (29) 二宮尊徳の「天地自然の命分、草木の命分、虫魚の命分、禽獸の命分」（齊藤高行『口訳報徳外記』、『二宮先生遺訓抄』報徳文庫、1935.）を参照されたい。さらに詳しくは『三才報徳金毛録』を参照のこと。
- (30) 二宮尊徳の次の歌を参照されたい。「音もなく臭もなく常に天地は書かざる経を繰りかえしつつ」、「水鳥のゆくもかるも跡たえてされども道は忘れざりけり」。
- (31) 本稿は「生の経済学の提唱」（『自然と実学』日本東アジア実学研究会、2000）ならびに「生命経済学の提唱」（『戦後日本の経済思想』所収、2006）をもとに大幅に加筆修正したものであることを断っておきたい。